

三角縁神獣鏡は果たして魏鏡か ～鉛同位体比から見た三角縁神獣鏡～

新井宏 元韓国国立慶尚大学校招聘教授

前回、従前の青銅器鉛同位体比を用いた「鉛産地定説」に誤りがあったことや、それを正して、弥生中期の始まりについて、歴博のBC370年説が「150年古すぎる」ことを述べた。その際には、鉛同位体比法の概要についても説明し、指紋やDNA鑑定と同じように、青銅器の類似判定に用いると極めて大きな威力を発揮することも紹介した。

今回は、いよいよ、この鉛同位体比を用いて、三角縁神獣鏡の産地問題について、従来の論争とは完全に独立し、極力「科学的な議論」を進めたいと思っている。

周知のように、三角縁神獣鏡は、① 径22cmほどの大型鏡で同範鏡が多く、② 全国の古墳から既に500面ほど出土し、③ 同範鏡の共有関係から古墳時代の統治方式が論じられ、④ その初期の鏡については魏が卑弥呼に下賜した「銅鏡百枚」とする説が有力であった。しかし、⑤ 未だ中国からの出土例がないこと、⑥ 文様に日本独自なものや銘文の韻に乱れが見られること、⑦ 中国では実在しない年号が入った鏡があること、⑧ 製作技術面の研究、等々から、近年では、日本で造られたとする見解も拮抗している。これに鉛同位体比という面からの見解を述べる。

実は、本日紹介するのは、2007年11月に行われたシンポジウム『古代の鏡と東アジア』（学生社）において、三角縁神獣鏡に関心の深い参加者を対象に話した内容であり、専門的な議論もかなり含まれている。極力、平易に紹介したいが、中核的な議論については、ぜひご理解願いたいと思っている。結論的に言えば、極く初期の例外があるかもしれないが、大部分の三角縁神獣鏡は日本で製作されたと考える。

(1) はじめに

今回の報告は、鉛同位体比を利用した「独立した議論」であるが、そうは言っても考古学的な成果をまったく援用せずに議論を進めるわけには行かない。ただし、その場合でも、できる限り国産論ではなく、魏鏡論者の意見を採用することにはしている。結論が「三角縁神獣鏡は魏鏡ではない」とでた時に、国産論者の意見を採用しては、循環論に陥るおそれがあるからである。

まず、はじめに簡単な例を示して置きたい。この例を理解して頂くことで、「三角縁神獣鏡が魏鏡ではない」との認識に至るプロセスを共有していただきたいからである。

魏鏡論者の岡村秀典氏や福永伸哉氏の精緻な研究によれば、初期の三角縁神獣鏡と時期を接する魏鏡は斜縁神獣鏡である。したがって、まず、三角縁神獣鏡と斜縁神獣鏡、および同時期の日本製仿製鏡の鉛同位体比を比較して見る。その結果は、三角縁神獣鏡は斜縁神獣鏡とは似ていずに、むしろ日本製仿製鏡と良く一致している。

表1 斜縁二神二獣鏡と三角縁神獣鏡A段階の鉛同位体比比較

鉛同位体比分類 $^{208}\text{Pb} / ^{206}\text{Pb}$	2.1051 ~ 2.1100	2.1101 ~ 2.1150	2.1151 ~ 2.1200	2.1201 ~ 2.1250	2.1251 ~ 2.1300	2.1301 ~ 2.1350	2.1351 ~ 2.1400
斜縁二神二獣鏡	2	1	4	1			
三角縁神獣鏡A段階				5	9	5	2
庄内・古墳早期仿製鏡			1	4	1	2	

(2) 朝鮮半島や日本の方鉛鉱鉛の利用

鉛は融点も低く製錬が簡単である。それは、銅や錫の供給を中国に依存していた時代でも、鉛だけは朝鮮半島や日本で自給していた可能性が高いことを意味している。その決定的な証拠は、北朝鮮の楽浪土城から出土した方鉛鉱と韓国慶尚南道の德里古墳群から出土した方鉛鉱 2 点である。

以上2件の鉛同位体比については、完全に一致する鉛鉱山が朝鮮半島と対馬にある。そればかりでなく、楽浪土城の方鉛鉱の組成は弥生・古墳期の日本出土の鉛製品や鉛ガラスと良く一致しているし、德里古墳の方鉛鉱は、佐賀県の久里大牟田遺跡等から出土した弥生期の鉛矛の鉛同位体比と誤差内で一致している。三角縁神獣鏡の鉛原料を考える場合には、朝鮮半島や日本産も併用されたことを排除できないのである。

(3) 朝鮮半島産鉛の使用例

鉛は青銅器の主原料のひとつであるばかりでなく、融点降下の効果があり、铸造性を改善する目的でも添加される。その事例としては、楽浪土城の場合と平原弥生古墳の場合等を挙げることができる。

いずれも鉛が朝鮮半島産であることに注目する必要がある。もともと平原弥生古墳の鏡は超大型仿製鏡 4 面以外の鏡も、柳田康雄氏は、詳細な理由を挙げて大部分が仿製鏡であると結論付けている。

このように、考古学的な知見と鉛同位体比の解析から得られた結論は一致して平原鏡の多くが仿製鏡であることを示している。なお、図 4 には平原弥生古墳の例の他に、福岡県小倉区今村清川町の前期古墳から出土した仿製鋸歯文鏡の例を追記している。

以上のような検討結果は、仿製鏡の製作開始が三角縁神獣鏡の時期を大幅に遡っていることを示している。

(4) 複製鏡の存在(同一遺跡出土の場合)

三角縁神獣鏡の比較対象は斜縁神獣鏡ば

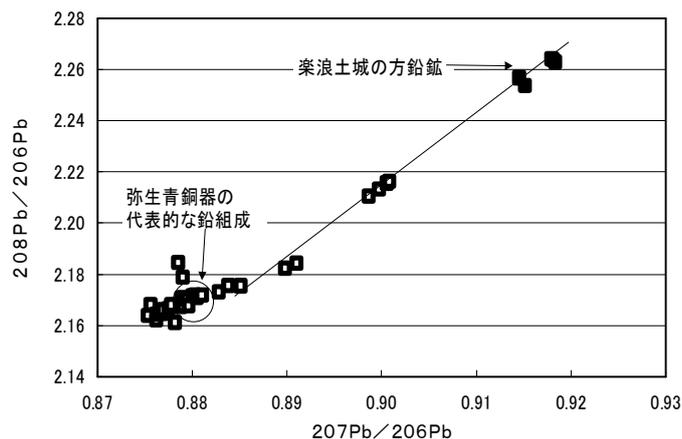


図3 楽浪土城出土の遺物と方鉛鉱の関係

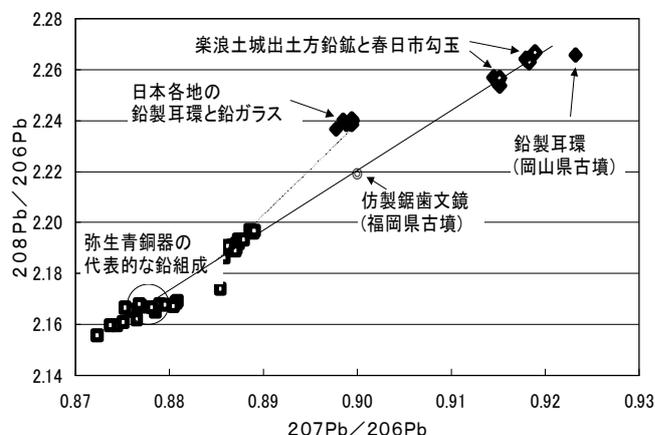


図4 平原遺跡出土の弥生漢式鏡と添加鉛の関係

かりではない。後漢鏡や魏晉鏡などとの総合的な比較も重要である。ただし、残念なことに、中国出土の魏鏡については、未だ1面の分析も行われていない。そのため、中国鏡の鉛同位体比は、現状では日本出土の「舶載鏡」によらざるを得ない。

しかし、「舶載鏡」には、姿や形は中国鏡に似ていてもコピー鏡などの複製鏡が混じっている。

例えば、同一遺跡から出土した鏡の中に、中国での流行時期も流行地域も異なりながら、鉛同位体比を見るとほぼ一致している事例が数多くある。「他人の空似」とばかりは言えないのである。

漢鏡5期の鏡と仿製鏡、漢鏡7期の鏡と仿製鏡、華南鏡と華北鏡と楽浪鏡など本来は別の鉛同位体比に属する鏡種でありながら、まったく同一の鉛同位体比を示す例が多い。

特に兵庫県城の山古墳の魏晉鏡2例や、兵庫県鶴山丸山古墳の仿製鏡の内10面の例では、同一の鉛同位体比を示し、同時に発注し同時に入荷を示唆している。

(5) 複製鏡の存在(紀年鏡の場合)

国内出土の「魏の紀年鏡」で鉛同位体比が判明しているものが、五種九面ある。表には相互間の鉛同位体比類似係数の関係も示す。

表4 紀年鏡の相互間の鉛同位体類似指数

鏡出土古墳	鏡名称		S2	S3	V1	V2	W1	W2	B1	B2
群馬県柴崎蟹沢 山口県竹島 兵庫県森尾	正始元年三角縁神獣	S1	0.278	0.209	0.048	0.203	0.244	0.156	0.338	0.353
		S2		0.154	0.201	0.132	0.189	0.138	0.183	0.149
		S3	0.154		0.246	0.022	0.053	0.053	0.129	0.144
京都府広峯15号 辰馬考古資料館	景初4年盤龍鏡	V1	0.201	0.246		0.239	0.280	0.193	0.375	0.389
		V2	0.132	0.022	0.239		0.068	0.047	0.136	0.150
京都府大田南5号 出所地不明個人蔵	青龍3年方格規矩鏡	W1	0.189	0.053	0.280	0.068		0.091	0.095	0.109
		W2	0.138	0.053	0.193	0.047	0.091		0.182	0.197
島根県神原神社	景初3年三角縁神獣鏡	B1	0.183	0.129	0.375	0.136	0.095	0.182		0.038
		B2	0.149	0.144	0.389	0.150	0.109	0.197	0.038	
大阪府黄金塚	景初3年画文帯神獣鏡	Y	0.201	0.130	0.116	0.123	0.164	0.076	0.273	0.258

黄金塚景初3年画文帯神獣鏡と神原神社古墳景初3年三角縁神獣鏡は内区同型

これを見ると、同範鏡でも鉛同位体比が大きく異なり、同時に鑄造したとは考えられないものがある反面、年号の異なる鏡に鉛同位体比が一致していて、同時に鑄造した可能性を示すものがある。

Aグループ(正始元年森尾鏡、景初4年辰馬鏡、青龍3年大田南鏡、青龍3年個人蔵鏡)

Bグループ(正始元年柴崎鏡、景初4年広峯鏡)

(6) 後漢期・魏期の青銅器鉛推定

真の舶載鏡の鉛同位体比を知るためには、複製鏡を除外する必要がある。そのため、中国での製作時期と日本での副葬時期が近い場合を「舶載鏡」、離れている場合を「複製鏡」と仮定してみた。

その結果、「舶載鏡」と「複製鏡」とで、鉛同位体比の分布に差があることが一目瞭然となった。

そのような前提に立てば、真の後漢鏡・魏鏡の鉛同位体比は、全体の鉛同位体比分布から複製鏡の鉛同位体比分布を差引いた分布となる。かくして、三角縁神獣鏡の鉛同位体比は後漢鏡・魏鏡とは異なり、仿製鏡と良く一致しているとの結論が得られた。

(7) 中国産鉛と三角縁神獣鏡の関係

漢代の鉛と真の中国鏡の鉛(推定)、および三角縁神獣鏡の鉛について、鉛同位体比の関係を図示してみると、三角縁神獣鏡の鉛同位体比は、中国の鉛鉱山とも中国鏡とも、唐宋銅銭とも分布が

大きく異なっている。それに対して、三角縁神獸鏡の鉛同位体比は、朝鮮半島の鉛鉱山、朝鮮銅銭の分布内に含まれている。更に検討すると、韓国全州鉱山の鉛や日本の神岡鉱山の鉛を部分的に添加剤として使用したと考えるべき分析例が多くある。

鉛の製錬は容易で、方鉛鉱を酸化錫などと同時に溶けた銅に添加すれば、鉱石をそのまま使用できることを考慮すると、三角縁神獸鏡の鉛原料は、中国産だけではなく、朝鮮半島と日本産も併用されていたと考える。

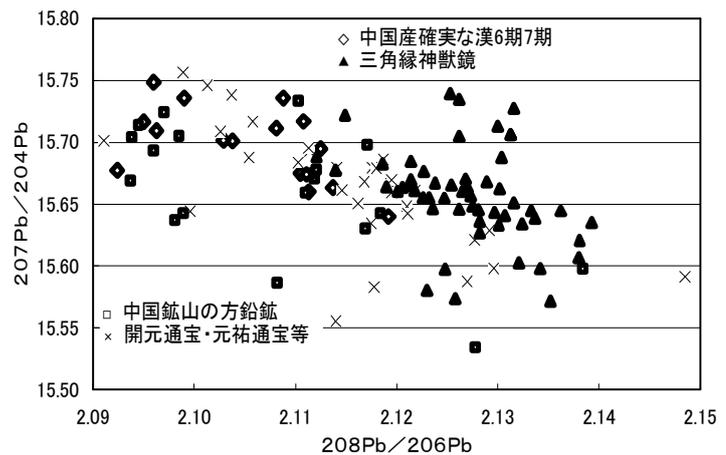


図8 中国産が確実な鉛と三角縁神獸鏡の関係(G式)

(8) 魏晉倣古鏡の問題 省略

(9) 方形鈕孔と鳥目の問題 省略

(10) おわりに

三角縁神獸鏡の研究史を辿れば、議論は複雑で多岐にわたり、まだまだ触れたいことが沢山ある。しかし、時間にも紙面にも制約の有る中で、専門的な議論に走っても迷惑であろう。それよりも、この機会にチョット雑談的に述べてみたいことがある。

- ① 流行した商品には必ず偽物が現われる。
- ② 様式が変化するのは、需用者の注文か製造者のコスト低減である。圧倒的な需要地である日本の要求を、どのようにして魏に伝えたのであろうか。
- ③ 三角縁神獸鏡は凸面鏡であり、どんな美人でも不美人に写る。
- ④ 品質が劣る仿製三角縁神獸鏡は、金属学的組成からみて黄金色に耀っていた。日迎えや葬礼では黄金色が珍重されたのではないか。葬礼の花輪のような存在だったかも知れない。
- ⑤ 中国には大型鏡や同型鏡が極めて少ない。だから、大型鏡や同型鏡の作鏡技術は日本の方が圧倒的に進んでいたと考えるのが技術史の視点である。
- ⑥ 「なぜ中国からなぜ出土しないのかと問われ”特鑄説”で答え、”特鑄説”の根拠は問われて、中国から出土しないからと答える」……笑い話ではない。

追記) 中国考古学界の大御所王仲殊氏の最新論文「再論日本出土的景初四年銘三角縁神獸鏡」『考古』2012.6に、筆者の研究について触れられていたので紹介する。

……特に注目値することは、数年前であるが、日本の著名な金属考古学者新井宏氏が、三角縁神獸鏡に含まれる鉛同位体比率の測定に基づき、……自然科学の研究分野からも、三角縁神獸鏡が中国の「魏鏡」ではなく、日本で製作されたことを確認することになった。

日本考古学界で私と同様な見解をもつ学者たちは、これに感動したものである。ある学者の特別に書かれた文章によれば、新井宏氏の研究成果を称賛すると同時に、私が主張するところの、「景初四年」銘三角縁盤龍鏡は絶対に中国で製作されたものではないという見解を引用しており、これにより定説となっている。

(平松健氏訳)